

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

タバココナジラミのウリ類退緑黄化ウイルス保毒状況と防除対策(技術情報第8号)
について(送付)

タバココナジラミのウリ類退緑黄化ウイルス(以下、CCYVとする)保毒状況とウリ科野菜の退緑黄化病に対する防除対策について取りまとめましたので、業務に御活用下さい。

記

タバココナジラミのCCYV保毒虫率は平年に比べてやや低く、誘殺数は平年並ですが前年に比べて多い状況です。タバココナジラミの発生量が増加すると退緑黄化病の被害の拡大が懸念されるため、防除対策を徹底しましょう。

ウリ科野菜栽培主要3地域(熊本、鹿本、菊池)で、夏秋期から栽培を開始するウリ科野菜の退緑黄化病の発生リスクを判断するため、タバココナジラミの誘殺数およびCCYVの保毒虫率を調査した。

1 調査結果

- (1) 8月上旬～中旬にかけて黄色粘着板(10×10cm)に誘殺されたタバココナジラミは、2.2頭/日/枚(平年2.1頭/日/枚)で、平年並であった(表1、図1)。
- (2) 8月上旬～9月上旬にかけて黄色粘着板に誘殺されたタバココナジラミのCCYV保毒虫率は23.7%(平年値32.7%)で、平年に比べてやや低かった(表1、図2)。
- (3) 退緑黄化病の発生リスクの指標となる保毒虫数は0.5頭/日/枚(平年0.8頭/日/枚)で、平年比やや少であった(表1、図3)。
- (4) 福岡管区气象台が9月16日に発表した九州北部地方1か月予報によると、気温は平年より高く推移すると予想されており、タバココナジラミの活動に好適な条件が続くと考えられる。

2 防除対策

退緑黄化病の発生リスクの指標となる保毒虫数は平年比やや少であり、タバココナジラミのCCYV保毒虫率も平年に比べてやや低いですが、誘殺数は平年並である。今後、タバココナジラミの活動に好適な条件が続き、野外のタバココナジラミが増殖することで、ハウス内へのタバココナジラミの飛び込み頻度が高まり、退緑黄化病の感染機会が増加することが懸念されるため、以下の対策を徹底する。

栽培前のほ場

- (1) これから定植するほ場では、タバココナジラミを栽培ほ場に「入れない」対策を徹底する。施設のサイド開口部に目合い0.4mm防虫ネット、谷換気部に目合い1mm以下の防虫ネットを被覆する。すでに被覆しているハウスについては、被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無いか点検し、必要に応じて補修する。
- (2) 育苗期後半に使用できる薬剤を定植2～3日前に処理する。また、定植前に処理した薬剤の効果が低下する定植20～30日後に成虫に対して効果の高い薬剤を散布する。
- (3) 育苗ハウスから苗を運ぶ際には、移動中にタバココナジラミが寄生しないよう、運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。

栽培中のほ場

- (1) タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策を徹底する。現在栽培中のほ場では、栽培終了まで、タバココナジラミの防除を継続して行う。
- (2) タバココナジラミを施設外に「出さない」対策を徹底する。栽培終了後は直ちに密閉処理を行い、ほ場内のタバココナジラミを死滅させる。露地栽培などの密閉できないほ場では、成虫に効果の高い薬剤で防除したうえで植物残さを早急に片付ける。

共通

- (1) 施設内の発病株や周辺の野良生えは、重要な伝染源となるので除去する。
- (2) ウリ科野菜の周年栽培地帯におけるメロン退緑黄化病発生リスクは、5月から12月まで高い水準で推移する（[農業研究成果情報 No. 597\(平成 25 年 5 月\)ウリ類周年栽培地帯でのメロン退緑黄化病発生リスクの季節変動](#)）ので、今後も防除を徹底する。

表1 各調査年におけるタバココナジラミの誘殺数、保毒虫率、保毒虫数

調査年	R3	R2	R1	H30	H29	H28	平年
誘殺数	2.2	1.5	1.0	3.9	3.0	1.1	2.1
保毒虫率	23.7%	41.3%	30.3%	30.7%	25.3%	36.1%	32.7%
保毒虫数	0.5	0.7	0.3	1.6	0.8	0.4	0.8

※平年値は過去5か年の平均

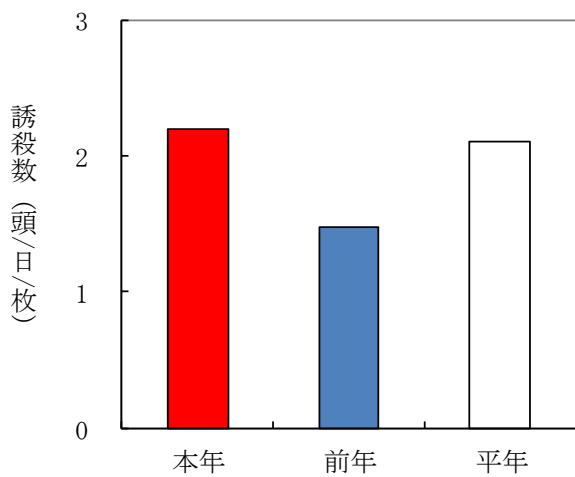


図1 ウリ科栽培地帯に設置した黄色粘着板によるタバココナジラミ成虫誘殺数

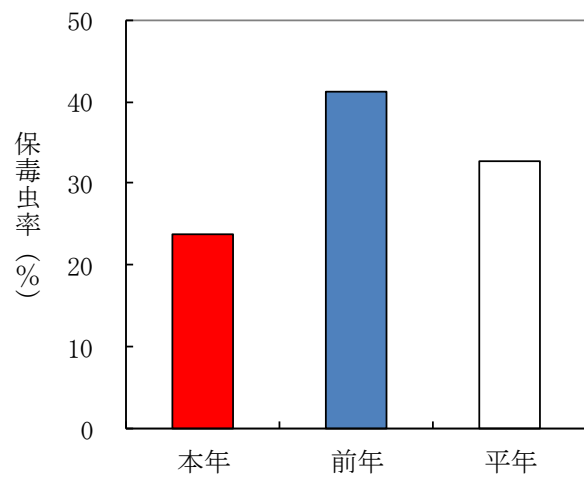


図2 粘着板に誘殺されたタバココナジラミ成虫のウリ類退緑黄化ウイルス保毒虫率

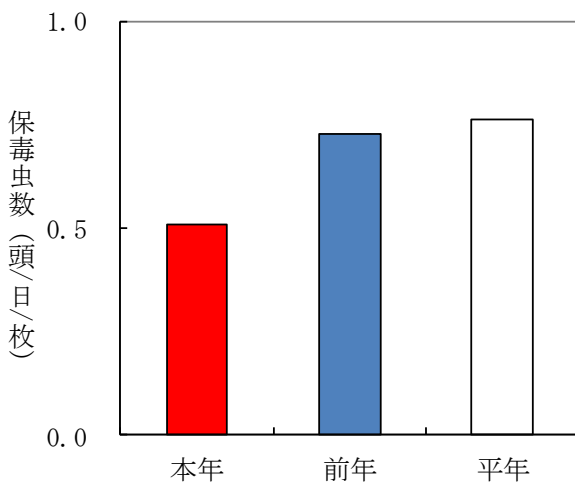


図3 ウリ科栽培地帯のタバココナジラミ成虫の保毒虫数

熊本県農業研究センター 生産環境研究所
 予察指導室 (病害虫防除所)
 担当：中井 TEL：096-248-6490